

DI 委員会トピックス

角膜のムチン産生を促すドライアイ治療薬 ムコスタ点眼液

【概要】

ドライアイ治療薬のレバミピド点眼薬(ムコスタ®点眼液UD2%)が2011年11月に薬価収載され、2012年1月5日に発売された。適応は「ドライアイ」だが、使用できるのは「涙液異常に伴う角結膜上皮障害が認められ、ドライアイと診断された患者のみ」。1回1滴、1日4回点眼する。

ドライアイは、目の不快感や視機能異常を伴う慢性疾患であり、眼が乾く、ゴロゴロするという不快感程度の症状から始まり、悪化すると日常生活にも支障を来す。近年、コンピュータ作業の増加、エアコンなどによる室内乾燥、コンタクトレンズや屈折矯正手術の普及などにより、ドライアイ患者が増えていると言われている。

現時点では、ドライアイの根本的治療法はなく、涙液分泌量低下などを補う点眼薬による対症療法が中心となっている。従来よりヒアルロン酸ナトリウム点眼薬(ヒアレイン®)や人工涙液が用いられているほか、2010年12月には、細胞内カルシウムイオン濃度を上昇させ、水分およびムチン分泌を促進させるP2Y2受容体作動薬のジクアホソルナトリウム(ジクアス®)が発売されている。

レバミピドの経口剤(ムコスタ®錠)は、胃粘液(ムチン)増加作用が知られており、防御因子増強薬として広く臨床使用されている。今回承認された点眼薬では、非臨床試験において、結膜上にあるゴブレット細胞を増やすという新しいメカニズムでムチン産生を促進することが確認されている。また臨床試験では、角膜および結膜上皮障害改善効果とともに、自覚症状改善効果も示されており、長期試験での有効性の維持や、安全性も確認されている。なお、1月に発売される製品は、水性懸濁の二次汚染防止の保存剤を使用していない無菌ディスポーザブルタイプのユニットドーズ(1回使い切りタイプ)となっている。薬価は1本27.10円(1日薬価108.40円)。

レバミピド点眼液では、これまでの臨床試験で24.3%に臨床検査値異常を含む何らかの副作用が認められている。主な副作用として、苦味(15.7%)、眼刺激感(2.5%)、眼そう痒感(2.2%)、霧視(1.2%)などが報告されている。

- ① 懸濁液のため、薬剤を分散させるために、点眼容器の下部を持ち、丸くふくらんだ部分をしっかりとはじくこと
- ② 点眼後は目を静かに閉じ、目頭を1~5分軽く押さえてから目を開け、眼周囲に流出した液は拭きとること
- ③ 白色の懸濁剤のため、一時的に目の前が白くなることや目がかすむ等の症状が認められることがあるため機械の操作や自動車等の運転は注意すること

など、投薬時は十分に指導を行う必要がある。

【参考】

大塚製薬ホームページ

http://www.otsuka.co.jp/company/release/2012/0105_01.html